

近江米 情報

発行 / 近江米振興協会

平成31年
1
月号

H30.11.23

「10万人のふれあい広場2018」イベント(大阪城公園にて)

大津市松本一丁目2-20 滋賀県農業教育情報センター内 編集責任者 小久保 泰
TEL(077)523-3920 FAX(077)523-5611 ★ホームページ <http://www.ohmimai.jp/> ★E-mail: shiga@ohmimai.jp



近江米振興協会会長
滋賀県知事

三日月 大造

あけましておめでとうございます。

皆様には、健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は米原市での竜巻、そして大雨、その後は一転しての猛暑、さらに度重なる台風の接近など、これまでにない大きな気象変動に見舞われました。

特に、9月4日の台風21号による影響は、県内全域にわたり、中でもビニールハウスなど、園芸産地における被害は、平成で最大となるものでした。

このため、県では、被災された生産者の営農意欲の回復や産地の維持が何よりも大切であるとの観点から、国の事業の活用と併せて、県単独の事業を講じることにより、施設等の復旧対策を進めております。

今後も気象変動によるリスクが高まることが想定されるため、昨年の災害を教訓として、産地におけるさらなる技術対策を進めるとともに、農業共済をはじめとする保険制度への加入を促進してまいります。

さて、昨年の近江米の作柄につきましては、農林水産省が公表する作況指数(12月10日)は「99」の「平年並み」(全国は「98」の「やや不良」となっていますが、気象変動の影響等により、生産者が実感され

る作柄との間に乖離があるともお聞きしております。

こうした中、日本穀物検定協会の食味ランキングにおいて、3年連続で最高ランクの「特A」評価をいただいた本県育成の「みずかがみ」は、記録的な猛暑に耐え、1等米比率(10月31日現在)が89.9%と高い水準を確保することができました。生産者の皆様をはじめ、高品質・良食味の米づくりを御指導いただいた農業団体や行政機関の皆様にご心よりお礼を申し上げます。

その成果もあり、「みずかがみ」は卸売業者等から高く評価いただき、現在、需要に生産が追いついていない状況にあることから、本年産に向けては、関係者が一体となって、さらなる生産拡大に努めてまいりたいと考えています。

また、平成30年産からスタートしました「米政策の見直し」が2年目を迎えます。近江米振興協会では、環境こだわり栽培など近江米の強みをより発揮しつつ、消費者や流通関係の皆様が求める米づくり、まさに「マーケットインを強く意識した米づくり」を進めるための指針として、昨年3月に「近江米生産・流通ビジョン」を策定いたしました。

今後、このビジョンに基づき、「みずかがみ」をはじめ、環境こだわり農業の象徴となるオーガニック米など、滋賀ならではの、安全・安心でおいしい近江米づくりとそのPRに精一杯努めてまいります。

引き続き、皆様の御支援、御協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

本年が皆様にとって輝かしい一年となりますことをお祈りいたします。



平成31年産 近江米生産基本方針について

近江米振興協会

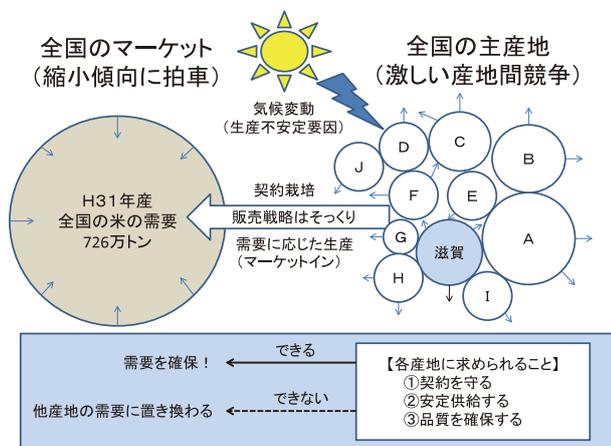


図 需要確保のために産地に求められること

平成30年産の近江米は、7月上旬の大雨、その後の一転しての猛暑、さらに出穂期から登熟期にかけての度重なる台風の接近や9月の長雨・日照不足など、厳しい生産環境下での栽培となりました。農林水産省が公表した作況指数(12月10日現在)は、本県では「99」の「平年並み」(全国「98」)でしたが、不作を実感している農家の皆さんの声が聞こえてきています。気候変動の影響が恒常化しており、作物生産の不安定要因が増大しています。

一方、米の需要動向に目を向けると、国の基本指針では、国内の人口が減少局面に入ったこと等を踏まえ、平成31年産米の需要見通しを前年産(735万トン)に比べ9万トン少ない726万トンと設定されました。全国の米のマーケットはこれまでの縮小傾向にさらに拍車がかかっているという状況です。

このような中、全国の主産地では品質や食味に優れた独自品種のデビューが相次いでおり、今後、産地間競争が一層激化することが予想されます。また、各産地の販売戦略は、「需要に応じた生産」、「契約栽培」など共通しているキーワードが多いことから、①契約を守る、②安定供給する、③品質を確保することができれば需要を確保できますし、できなければ他産地

に隙間を埋められて(需要を奪われて)しまいかねません(図参照)。このような厳しい生産環境に対応するため、近江米振興協会では、昨年3月に策定した「近江米生産・流通ビジョン」を基に、単年度の指針として「平成31年産近江米生産基本方針」を作成しました。

基本的な考え方は次の通りです。

①家庭用として流通している「みずかがみ」をはじめ、主力品種である「コシヒカリ」等の良食味品種について、食味の高位安定化を進めます。

②中でも食味ランキング(日本穀物検定協会)において、3年連続で「特A」を取得した「みずかがみ」については、ブランド力が向上するとともに消費者への知名度も上がり、販売先からの要望数量に生産が追い付いていない状況であり、今後も確実な需要が見込める品種として3,000ha以上の作付を目指します。

③「みずかがみ」は引き続き全量を環境こだわり米として生産拡大し、「コシヒカリ」は環境こだわり米の比率を高め、家庭用の近江米について、概ね全量が環境こだわり米となることを目指し推進するとともに、オーガニック農業を象徴的な取組として推進し、環境こだわり米、さらには近江米全体のブランドイメージの向上を図ります。

④栽培技術においては、恒常化している気候変動、特に夏期の異常高温に適応するため、土づくりをはじめ基本的な技術対策を進めた上で、生育状況に応じた施肥や水管理などの栽培技術情報の提供により技術対策の実践を徹底し、収量と外観品質の安定化を進めます。

⑤農地の集積・集約化や農業機械の効率利用とともに、ICT等の先端技術を活用したスマート農業に注目しながら生産コストの低減を推進します。

詳しい指針の内容は、近江米振興協会のホームページをご覧ください。



病害虫防除 ～平成30年度水稲病害虫の発生概況と31年産水稲・麦類の病害虫防除について～

滋賀県病害虫防除所

平成30年の主要な水稲病害虫の発生概況と、平成31年に特に注意が必要な水稲および麦類の病害虫対策について紹介します。

平成30年度の水稲病害虫発生概況

1) 葉いもち(発生量:やや少)

広域的な感染好適日は6月第3半旬に現れましたが、6月下旬から7月第3半旬にかけての高温により、発生は抑制され、発生量はやや少でした。

2) 穂いもち(発生量:少)

7月第3半旬から8月第4半旬にかけて降水量が少なく、日照時間は多かったことから、発生時期はやや遅く、感染拡大は抑制され、発生量は少でした。

3) 紋枯病(発生量:少)

6月中旬の気温が低く推移したことで、水平感染が抑制されました。その後、7月中旬から8月中旬にかけて降水量が少なかったことで垂直進展も抑制され、発生量は少でした。

4) 白葉枯病(発生量:平年並)

8月18日の台風20号の影響等により、一部地域で発生がありましたが、発生量は平年並でした。

5) ごま葉枯病(発生量:やや少)

発生は一部の地域に限られ、ほ場での広がりも少なく、発生量は、やや少でした。

6) ニカメイガ第1世代(発生量:やや少)

予察灯における越冬世代成虫の発ガ最盛期は早く、第1世代幼虫の発生時期は早くなりました。発生量はやや少でした。

7) ニカメイガ第2世代(発生量:やや少)

第2世代幼虫は、やや遅い発生となり、発生量はやや少でした。

8) トビイロウンカ(発生量:少)

予察灯への飛来およびほ場での発生は見られませんでした。

9) セジロウンカ(発生量:少)

8月下旬まで海外からの飛来は、ほとんどありませんでした。そのため、早生品種の栽培期間中、ほ場での発生量は少でした。

10) ヒメトビウンカ(発生量:少)

越冬量はやや少なく、予察灯への初飛来は遅くなりました。7～8月は高温・少雨が続いたため、増

殖に好適な条件となりましたが、海外からの飛来が少なかったことなどから、発生量は少でした。

表 平成30年度水稲主要病害虫発生概況一覧

病害虫名	発生時期	発生量
葉いもち	平年並	やや少
穂いもち	平年並	少
紋枯病	平年並	少
白葉枯病	遅	平年並
ごま葉枯病	遅	やや少
ニカメイガ(第1世代)	早	やや少
ニカメイガ(第2世代)	やや遅	やや少
トビイロウンカ	遅	少
セジロウンカ	遅	少
ヒメトビウンカ	遅	少
斑点米カメムシ類	早	平年並

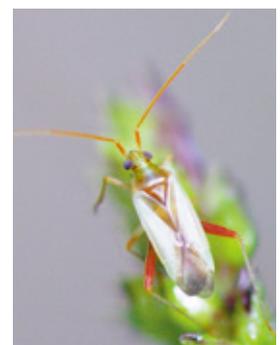
注) 発生時期および発生量は平年比



イネ茎内のニカメイガ幼虫(左)と
ニカメイガ幼虫による白穂被害(右)



ヒメトビウンカ(雌成虫)



アカスジカスミカメ

11) 斑点米カメムシ類(発生量: 平年並)

4月中旬～5月の気温が高く推移したことから、発生時期は早くなりました。7月～8月の気温が高く、増殖に好適な条件となりましたが、台風等の豪雨により発生量は抑制されました。

平成31年度の水稲病虫害防除について

1) 縞葉枯病

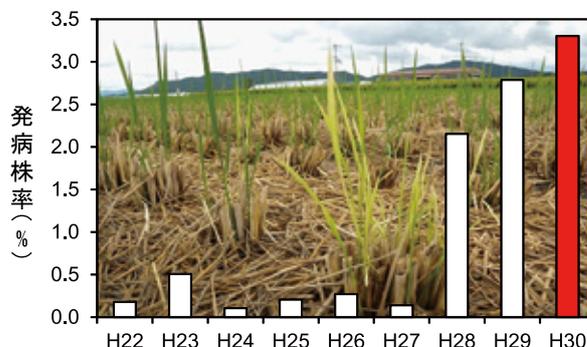
本ウイルスを保毒するヒメトビウンカは、越冬後、イネを吸汁加害して媒介します。刈株再生芽(ヒコバエ)調査では、平成28年以降、本病が急増しており(右グラフ)、県内全域で発病が認められています。蔓延防止のため、刈株再生芽での発病が目立つほ場・地域では、速やかに水田を耕起し、次作ではヒメトビウンカに効果のある育苗箱施用剤による防除を実施しましょう。

2) ニカメイガ

幼虫が刈り株や稲わら内で越冬するので、早急に耕起を行い、越冬幼虫の密度を抑制しましょう。発生が多かった地域では田植時にニカメイガに効果のある育苗箱施薬剤を施用するか、6月上旬に本田に粒剤を施用するなど、防除を徹底しましょう。

3) 紋枯病

前年に発生が多かったほ場や初期生育が旺盛なほ場では注意が必要です。また、出穂後の気温が高温で多雨に経過すると上位進展が助長されます。極早生・早生品種では発病を認めたら、中生・晩生品種では出穂20日前の発病株率が15～20%以上であれば防除を行いましょう。



刈株再生芽でのイネ縞葉枯病発病株率の年次変動
(背景は刈株再生芽に発病したイネ縞葉枯病)



紋枯病の病徴

平成31年産麦類の病虫害防除について

1) 赤かび病(大麦、小麦)

開花期～乳熟期に降雨日が多く、平年より気温が高いと多発します。開花始め～開花期(二条大麦は穂揃い10日後)に防除し、六条大麦はその1週間後に2回目の防除をします。「びわほなみ」については、赤かび病に弱く「農林61号」より開花時期が3～4日早いので、防除が遅れないように注意してください。

また、小麦および二条大麦でも、1回目の防除後に降雨が続く場合は、雨の止み間をみて追加防除を行いましょう。収穫後、乾燥・調製するまでに時間がかかると被害粒が増加することがあるので、収穫後は速やかに乾燥させます。

2) 縞萎縮病(大麦、小麦)

2月下旬～3月上旬頃から葉に黄緑色の細長いかすり状の斑点の出現後、下葉は黄変して葉先から淡褐色になり、次第に枯れます。新葉はやや細めで内側に巻き、淡黄緑色の退色斑ができ、次の葉が出る頃にモザイク症状を現します。発病株は分けつが減り、草丈が低くなります。早播きすると発病が多くなります。土壌水分が多いと発生しやすいため排水対策に努めるとともに、土壌伝染するため、連作を避け、作業上の汚染土壌の移動に伴う病原の拡散を防止します。

3) 黒節病(大麦、小麦)

葉鞘に褐色の条斑が生じ、茎葉が枯死します。温冬の年に発生が多くなります。種子消毒剤として金属銀水和剤や銅水和剤の登録があります。耕種的な防除として、ほ場の排水を良くし、窒素肥料の過用を避けましょう。

滋賀県病虫害防除所ホームページ

<http://www.pref.shiga.lg.jp/g/byogaichu/>

最新の発生予察情報やIPM、病虫害の見分け方などの関連情報を載せています。また、農作物病虫害雑草防除基準へのアクセスもできます。

詳しくは検索してください。

滋賀 防除所

検索



平成30年産米の検査結果から

滋賀県農政水産部農業経営課

1. 検査状況

○滋賀県内における、平成30年10月末現在の検査数量は以下のとおりとなっています。

☆種類別	30年産米	前年同期	対前年比
水稲うるち玄米	71,377t	73,408t	97.2%
醸造用玄米	1,662t	1,553t	107.0%
水稲もち玄米	1,306t	2,174t	60.1%
計	74,345t	77,135t	96.4%

☆主な品種別(水稲うるち玄米)	30年産米	前年同期	対前年比
コシヒカリ	24,823t	26,369t	94.1%
キヌヒカリ	12,315t	12,999t	94.7%
日本晴	6,727t	6,783t	99.2%
秋の詩	6,090t	6,798t	89.6%
みずかがみ	9,396t	9,358t	100.4%

2. 品質概況

○滋賀県の10月末現在の水稲うるち玄米の1等比率は70.4%(前年同期72.9%)となっています。

☆主要な品種別の1等比率		☆2等以下に格付けされた主な理由	
コシヒカリ	69.3% (69.3%)	乳白(心白・腹白)	35.1% (39.3%)
キヌヒカリ	53.4% (63.1%)	整粒不足	33.0% (29.7%)
日本晴	69.2% (76.1%)	発芽粒	9.4% (0.2%)
秋の詩	72.8% (76.1%)	その他形質	7.1% (8.3%)
みずかがみ	89.9% (88.0%)		

注:()書きは29年産・10月末

○主要品種の品質概況

【早生品種】 6月下旬からの好天により籾数過多となったことに加え、「キヌヒカリ」や「コシヒカリ」では登熟初期(7月下旬～)の高温が影響し、乳白粒などの白未熟粒が平年に比べて多く発生しました。「みずかがみ」は、他の早生品種に比べて白未熟粒の発生は少なく、1等米比率は89.9%と高い水準を確保し、本年度も高温登熟性に優れる結果となりました。

【中生・晩生品種】 籾数過多に加え登熟後期(9月上旬～)の低温と日照不足により登熟不良となり、また、台風20号による倒伏のため、白未熟粒や青未熟粒が発生したことから、平年に比べてやや不良となりました。

【2等以下の格付理由】 籾数過多、早生品種での登熟初期の高温、台風20号による倒伏の発生等により、白未熟粒の発生が2等以下の格付理由として最も多く、次いで整粒不足となりました。

また、早生品種、中生品種ともに、台風20号や9月の長雨(台風21号)により刈取りが遅れたほ場では発芽粒が発生しました。

(参考)主要な品種の過去3カ年の1等比率(各年度、3月末現在の本県産のデータ)

	29年産	28年産	27年産
水稲うるち玄米 〈全国平均値〉	67.6% 〈82.2%〉	75.2% 〈83.4%〉	73.8% 〈82.4%〉
コシヒカリ	60.7%	80.2%	75.3%
キヌヒカリ	57.5%	62.2%	55.2%
日本晴	73.4%	61.0%	84.2%
秋の詩	69.7%	80.3%	85.3%
みずかがみ	89.2%	91.6%	87.7%



米 穀 情 勢

全農滋賀県本部 米麦農産部

1.消費動向

(1)総務省家計調査

総務省家計調査によると、平成30年9月の米の一世帯あたり購入量は、前年比86.6%と前年を下回り、平成29年10月からの12か月合計については前年比99.2% (66.04kg、前年差▲0.56kg)と下回り、パン(前年比100.2%)、めん(前年比101.3%)はともに上回った。

(2)量販店等の売り上げ動向

ア. チェーンストア協会加盟量販店の平成30年9月の食料品売上高は、既存店ベースで前年比102.8%と前年を上回り、食料品のうち、米が含まれる「その他食品」の売り上げも前年比102.2%/と上回っている。

イ. コンビニエンスストアの平成30年9月は、秋雨前線の停滞や2度の台風の影響等により、全国的に降水量がかなり多かったこと等から来店客数に影響を及ぼした。しかし、10月のたばこ税増税に伴う駆け込み需要や引き続きカウンター商材や惣菜等の中食が好調に推移したこともあり、全店・既存店ともに売上高が前年を上回る結果となった。

米飯類が含まれる「日配食品」の売上高は、前年同月を▲0.3%下回った。

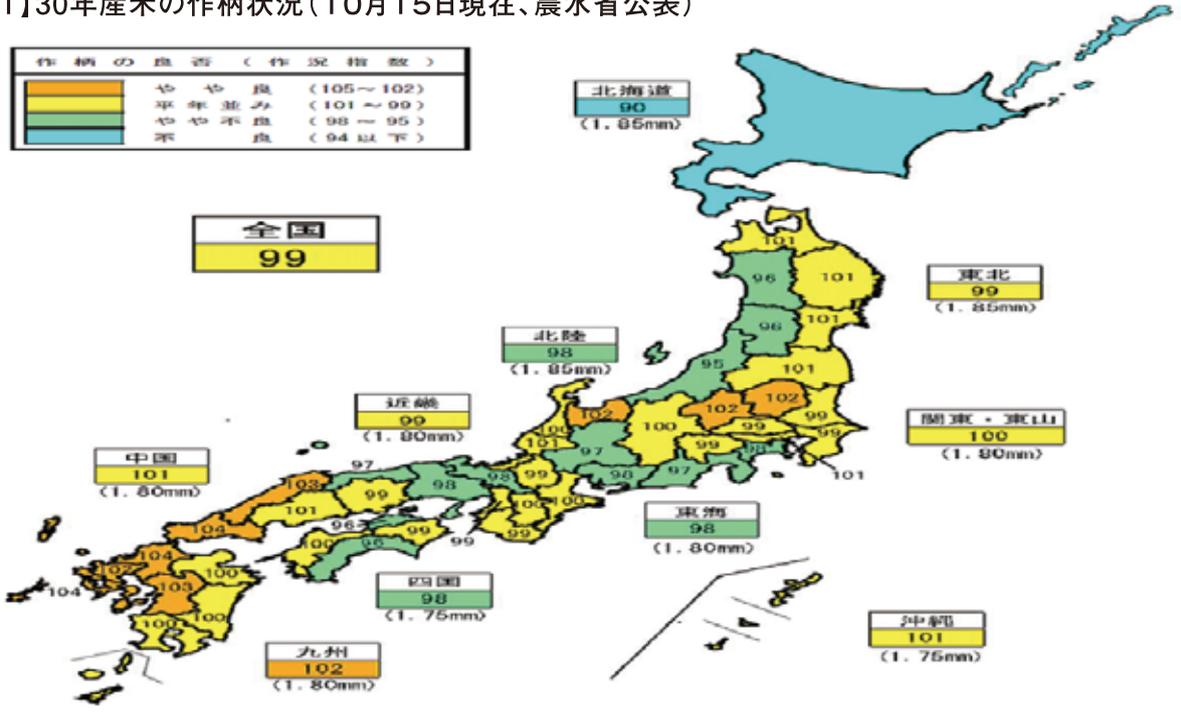
ウ. 外食産業の平成30年9月は、北海道胆振当部地震や2度の台風上陸などにより、休業や営業短縮を余儀なくされた店舗も少なくなかった。特に近畿や首都圏の交通機関の計画運休により大消費地の客足にも影響したが、全体の客数は前年を上回り、価格改定等による客単価の上昇が続いており、全体売上は前年比103.0%と、25か月連続して前年を上回った。

2.平成30年産水稻の作柄状況および作付動向

(1)農水省公表によると、10月15日現在における水稻の作柄は、関東・九州などの9県で作況102～104の「やや良」となったものの、北海道が作況90の「不良」、東北の日本海側など12県で作況95～98の「やや不良」となったことから、全国の10aあたり予想収量は529kg(前年差△5kg)、作況指数は99の「平年並み」となっている。

(2)また、主食用作付見込面積に10aあたり予想収量を乗じた予想収穫量(主食用)は、733万ト(前年731万ト、前年差+2.3万ト)と見込まれる。

【図表1】30年産米の作柄状況(10月15日現在、農水省公表)



【図表2】30年産米の作付状況(9月15日現在、農水省公表)

(単位:万ha)

	主食用米		戦略作物等作付面積								
	作付面積	(参考) 生産数量目標 (面積換算値)	内訳								
			加工用米	米粉用米	飼料用米	WCS	新市場 開拓用米 (輸出用米)	備蓄米	麦	大豆	その他
27年産	140.6	141.9	4.7	0.4	8.0	3.8	0.2	4.5	9.9	8.7	10.0
28年産	138.1	140.3	5.1	0.3	9.1	4.1	0.1	4.0	9.9	8.9	10.2
29年産	137.0	138.7	5.2	0.5	9.2	4.3	0.1	3.5	9.8	9.0	10.2
30年産	138.6	—	5.1	0.5	8.0	4.3	0.4	2.2	9.7	8.8	10.2

3.需給見通し

7月に公表した農林水産省の需給見通しをもとに、30年産米の生産量を10月公表の予想収穫量733万ト(7月公表時▲2万ト)に修正した主食用米の31年6月末民間在庫量は、182万トとなる。

しかしながら、29年産米の価格が3年前と比べ3割程度上昇するなか、業務用等の実需者では価格転嫁が難航し、米使用量の調整や輸入米へのシフトで対応する動きもみられており、ここ3年の需要量は、トレンド(△8万ト)以上の減少が続いている。また、の需給見通しでは、30/31年の需要量を前年から1万ト増の741万トと見通しているが、29/30年から30/31年にかけての需要量の減少幅を①トレンドの減少幅△8万ト、②過去3か年の平均減少幅△14万トと仮定すると、31年6月末民間在庫量はそれぞれ191万ト、197万トと試算され、在庫量の適正水準と言われる180万トを大幅に上回る状況も危惧される。

【図表3】主食用米の需給見通し(全農試算)

(単位:万ト)

	農水省 基本指針 (30年7月)	試算値		
		供給変動	需要変動	
		予想収穫量 733万ト	前年▲8万ト 前年▲14万ト	
平成29年6月末民間在庫量	A	199		
平成29年産主食用米等生産量	B	731		
平成29/30年主食用米等供給量計 C=A+B		930		
平成29/30年主食用米等需要量	D	740		
平成30年6月末民間在庫量 E=C-D		190		
平成30年産主食用米等生産量	F	735	733	
平成30/31年主食用米等供給量計 G=E+F		925	923	
平成30/31年主食用米等需要量	H	741	741	732 726
平成31年6月末民間在庫量 I=G-H		184	182	191 197

(注1)「需要量の変動」の▲8万トはトレンド、▲14万トは前年差の過去3か年平均。

(注2)平成30年産主食用米等生産量は、10月15日現在の予想収穫量

4.30年産米の取扱状況

(1)集荷の状況(連合会)

30年産米の10月31日現在の集荷状況は、全国的に生育が早まったことから、1,307千ト(前年同期比103%)と、前年を上回っている。

(2) 主食うるち米の状況

ア. 販売状況

30年産米の10月末現在の契約数量は、524千トﾝ(前年比96%)と、前年を下回っている。また、販売数量は、10月末現在で174千トﾝ(前年比97%)と前年を下回っている。

イ. 市中価格の状況

30年産米の10月下旬の市中価格は、前年産の同時期と比較して、多くの銘柄で▲300～▲800円/60kg程度低い水準となっている。一方、横ばい～1,000円/60kg程度高い水準となっている銘柄も生じている。

【図表4】30年産米集荷実績数量(10月末現在、連合会)

単位:トﾝ

産地	30年産米(10/31現在)		29年産米			前年差		前年比	
	出荷契約 ①	集荷実績 ②	出荷契約 ③	集荷実績 (最終) ④	集荷実績 (前年同時期) ⑤	出荷契約 ⑥=①-③	集荷実績 (前年同時期) ⑦=②-⑤	出荷契約 ⑧=①/③	集荷実績 (前年同時期) ⑨=②/⑤
北海道・東北	1,129,031	572,475	1,094,619	1,006,159	544,996	34,412	27,479	103%	105%
関東・甲信	296,526	182,303	297,869	268,382	168,657	▲ 1,343	13,646	100%	108%
北陸	398,210	262,571	408,097	365,924	266,704	▲ 9,887	▲ 4,133	98%	98%
東海・近畿	231,167	129,036	233,701	216,829	137,918	▲ 2,535	▲ 8,882	99%	94%
中国・四国	207,695	106,299	211,899	178,695	100,829	▲ 4,204	5,470	98%	105%
九州	212,071	53,960	218,223	207,234	49,796	▲ 6,152	4,164	97%	108%
全国	2,474,699	1,306,644	2,464,409	2,243,224	1,268,900	10,290	37,744	100%	103%

注1) 県連・県農協の集荷実績は各県からの報告にもとづく。

注2) 本所買取分は除き、千葉・岡山は仮入庫分(仮入庫から買取)も含む。

【図表5】30年産主食うるち米契約・販売状況(10月末現在)

単位:千トﾝ、%

年産	契約数量	販売数量				
		7月	8月	9月	10月	合計
30年産	524	7	17	41	109	174
29年産	546	5	19	46	108	179
30/29	96%	130%	88%	88%	101%	97%
30-29	▲ 22	2	▲ 2	▲ 5	1	▲ 5

注1) ラウンドの関係で合計が合わない場合がある。

注2) 販売数量は、実出荷ベース。

【図表6】市中価格の状況(10月末)

単位:円/60kg、税抜

産地	宮城	秋田	福島	栃木	千葉	新潟	富山
銘柄	ひとめぼれ	あきたこまち	中通コシヒカリ	コシヒカリ	コシヒカリ	一般コシヒカリ	コシヒカリ
30年10月下旬(30年産)①	14,500	14,600	14,500	14,400	14,400	16,800	15,300
29年10月下旬(29年産)②	15,000	15,400	14,800	14,900	14,900	15,800	15,300
①-②	▲ 500	▲ 800	▲ 300	▲ 500	▲ 500	1,000	0

(注) 建値は、東京・大阪着基準、1等、包装代含む



平成30年産「みずかがみ」の生産状況と 平成31年産に向けた取り組み

近江米振興協会

◆はじめに

平成25年に本格デビューした「みずかがみ」は平成30年産で6年目を迎え、栽培面積は水稲作付面積全体の約8%を占めるまでに増加しました(図1)。

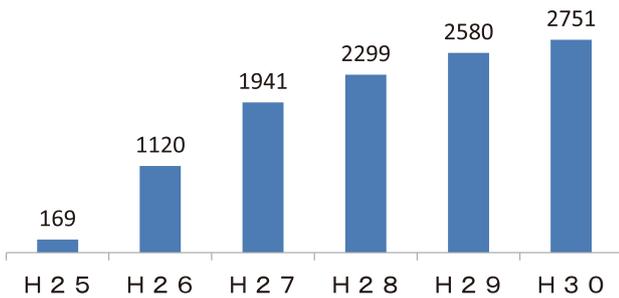


図1 「みずかがみ」栽培面積拡大中(ha)

この間、一般財団法人日本穀物検定協会が公表する食味ランキングにおいて、最高ランクである「特A」評価を平成27年産から3年連続で獲得し、近江米を代表する品種に成長を続けているところです。



全量を環境こだわり栽培で生産している「みずかがみ」は、消費者からは「安全・安心でおいしい」と高く評価されるとともに、販売先からは年間を通して安定した供給を強く要請されるなど、平成31年産以降においても確実な需要が見込まれています。

◆H30年産「みずかがみ」の生産状況

平成30年産の「近江米」は、7月上旬の大雨、そ

の後の一転しての猛暑、さらに出穂期から登熟期にかけての度重なる台風の接近や9月の長雨・日照不足など、厳しい生産環境での栽培となりました。このような中でも、「みずかがみ」は厳しい暑さにも耐え、農産物検査速報値(11月30日農林水産省公表)における1等米比率は89.6%と高く、「コシヒカリ」(67.7%)、「キヌヒカリ」(51.9%)と比較して暑さに対する強さが明確となりました。平成25年産からの1等米比率の推移をみても、「みずかがみ」の外観品質が安定して高いことがわかります(図2)。

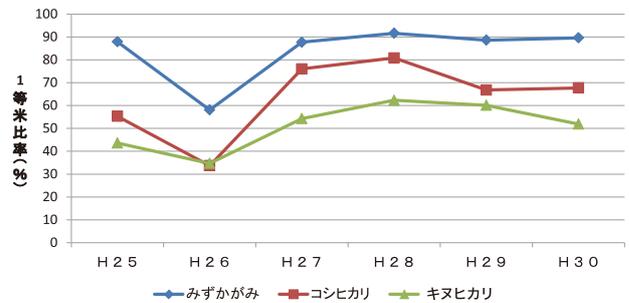


図2 早生品種の1等米比率の推移

一方、収量についてみると、「1反で9俵とれた」という生産者がおられる一方で、「8俵未満だった」という生産者もおられ、生産者によってばらつきが認められています(図3)。

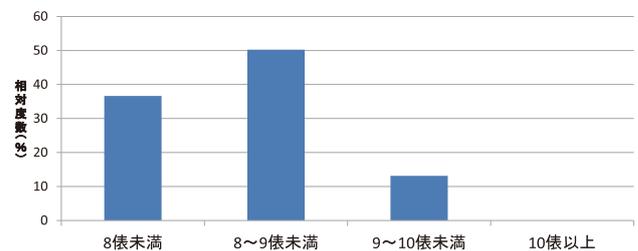


図3 収量の分布

(H30年度「みずかがみ」食味コンクールの結果より)

「みずかがみ」の品質は安定して高いので、収量をしっかりと確保することで、「コシヒカリ」とともに近江米を牽引していく代表的品種になり得るものと考えられます。

◆H31年産に向けて

①需要に応じて増産を!

全国の平成31年産米の需要見通し(718万～726万トン)は、平成30年産(733万トン)を下回る水準で、生産抑制の必要性が明確となる一方で、「みずかがみ」の需要量はますます高まっていて、増産を求められている現状です。(図4)。「みずかがみ」の需要が他県の銘柄に置き換わることがないように、3,000ha以上の作付けを目指し増産しましょう。

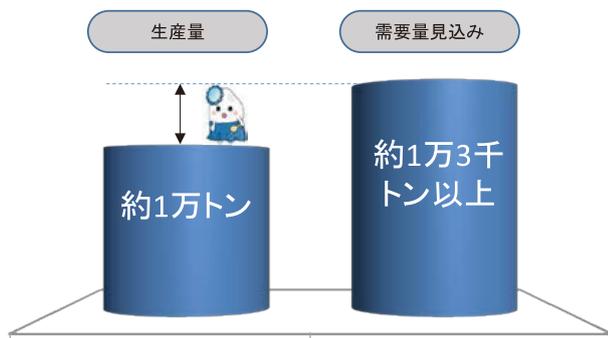


図4 「みずかがみ」の生産量と需要見込み

②メリットあります!

環境こだわり栽培における「みずかがみ」と「キヌヒカリ」の粗収入を比べると、「みずかがみ」の方が粗収入は大きくなっています。このように「みずかがみ」の生産メリットは確実に増えています。

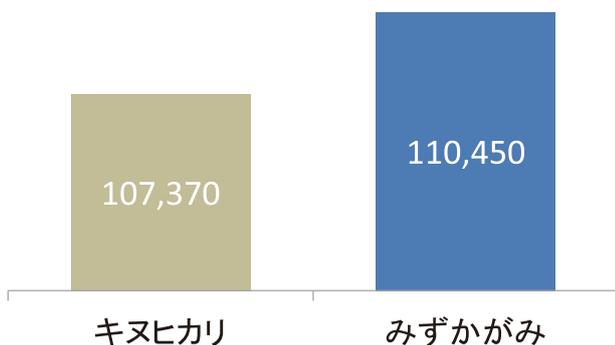


図5 環境こだわり栽培における「みずかがみ」と「キヌヒカリ」の10aあたり粗収入の比較(円)

(「みずかがみ」の1等米比率は全量1等、10aあたり単収8.5俵、「キヌヒカリ」の1等米比率が60%、10aあたり単収9.5俵の場合の大まかな試算による)

③品質を維持し収量を安定化させるために

「みずかがみ」を初めて栽培される方や、今まで栽培されていて「収量が伸びない」、「思ったほど品質が上がらない」など「みずかがみ」の栽培に不安を感じておられる方には、参考にしていただきたい栽培ポイントがあります。それは「初期生育をしっかりと確保すること」です。

このほど、近江米振興協会では、「みずかがみ」栽培のコツを取りまとめた「みずかがみ栽培マニュアル」を作成しました(図6)。



図6 「みずかがみ」栽培マニュアル (A5判・イメージ図・1月下旬に配布予定)

本マニュアルには、「みずかがみ」を高品質・安定生産するための栽培方法がわかりやすくまとめられています。是非とも一度手に取っていただき、まずは栽培方法のチェックから始めていただきたいと思います。

◆おわりに

近年は夏季の異常高温や少雨、大型台風の接近など特異的な気象条件が多発しています。今後も農作物の栽培では気候変動の影響を受けることが予想されることから、基本栽培技術を実践し、気候変動に強い栽培に努めましょう

そのうえで、その年々の気候に対処した施肥や水管理を行い、安定的に収量を確保していきましょう。そして、需要にしっかりと応えとともに、引き続き、「特A」産地に相応しい良食味生産に努め、消費者等の支持を確かなものにしていきましょう。



平成30年産水稻の生育概況と平成31年産に向けた技術対策

滋賀県農業技術振興センター 栽培研究部

～はじめに～

農林水産省が公表する滋賀県の平成30年10月15日現在における平成30年産水稻の作況指数は「99」となりました。しかし、水稻の生育や収量・品質の良否は、夏期の異常高温や台風などの気象による影響を強く受けたことから、品種、作期、ほ場毎に大きく異なりました。そのため、同じ早生品種であっても、農業技術振興センターにおける水稻作況調査では著しい減収や品質低下は認められなかった一方で、県内では減収・低品質化の事例が多く見られるという状況が生じています。そこで、本稿では水稻作況調査結果の分析と併せて、県内における収量・品質の低下事例について紹介し、平成31年産に向けた技術対策について示します。

平成30年産 水稻の生育概況

1) 気象概況

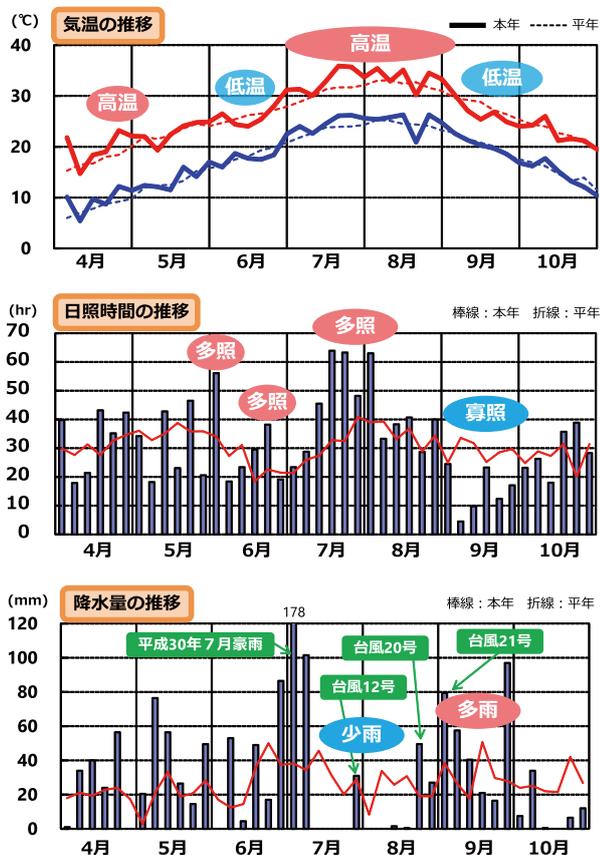


図1 平成30年稲作期間半月別気象図(彦根気象台)
注) 平年は平成20～29年(10年間)の平均値

本年は以下の3つの特徴的な気象条件が水稻に影響を与えたと考えられます。①6月下旬から9月初旬にかけての異常高温、②台風12号、20号、21号の接近、③9月上旬以降の低温多雨寡照。

2) 水稻作況調査結果から見た生育概況

水稻作況調査は以下の方法で実施しました。

<水稻作況調査耕種概要>

移植日 : 5月10日(稚苗、手植え)
 栽植密度: 「みずかがみ」・「コシヒカリ」18.5株/m²
 「秋の詩」22.2株/m²
 施肥 : 「みずかがみ」基肥4-穂肥3 (kgN/10a)
 「コシヒカリ」
 基肥2-追肥2-穂肥2-穂肥2 (kgN/10a)
 「秋の詩」
 基肥3-追肥2-穂肥2-穂肥2 (kgN/10a)
 平年値 : 平成25～29年(5年間)の平均値

《生育》

■ 早生品種では幼穂形成期以降の高温により生育の進みが早くなり、幼穂形成期から出穂期までの期間が短くなりました。

■ 「みずかがみ」および「コシヒカリ」は台風20号の影響を受け、平年よりも倒伏程度が大きくなりました。「秋の詩」では9月上旬以降の最高気温が低く、日照時間が少なく経過したため、成熟期は平年より3日遅くなりました。

《収量・品質》

■ 「みずかがみ」について、穂数は少なかったものの(平年比91%)、7月中旬以降が高温多照に経過したこと、葉色がやや濃く推移したことから、一穂粒数はかなり多くなったため(同比115%)、m²あたり粒数は多くなりました(同比105%)。登熟歩合は平年並(同比99%)で、千粒重はやや小さくなりました(同比97%)。精玄米重は平年並となりました(同比102%)。

■ 「コシヒカリ」について、穂数は平年並(平年比98%)で、一穂粒数は「みずかがみ」と同様になりました(同比115%)、m²あたり粒数はかなり多くなりました(同比113%)。台風の影響により倒伏程度が大きくなったため、登熟歩合は低く(同比92%)、千粒重はやや小さくなりました(同比97%)。精玄米重は平年より多くなりました(同比105%)。

■「秋の詩」について、穂数は少なかったものの(平年比94%)、一穂籾数はかなり多くなったため(同比118%)、㎡あたり籾数はかなり多くなりました(同比111%)。台風による不稔籾や登熟期間後半が低温多雨寡照に経過したことから、登熟歩合はかなり低くなり(同比90%)、千粒重はやや小さくなりました(同

比96%)。精玄米重は平年よりやや少なくなりました(同比96%)。

■「コシヒカリ」および「秋の詩」は、籾数過多と登熟期間の高温により、乳白粒の発生が多くなりました。また、3品種とも青未熟粒が増加し、外観品質は平年と比べてやや不良となりました。

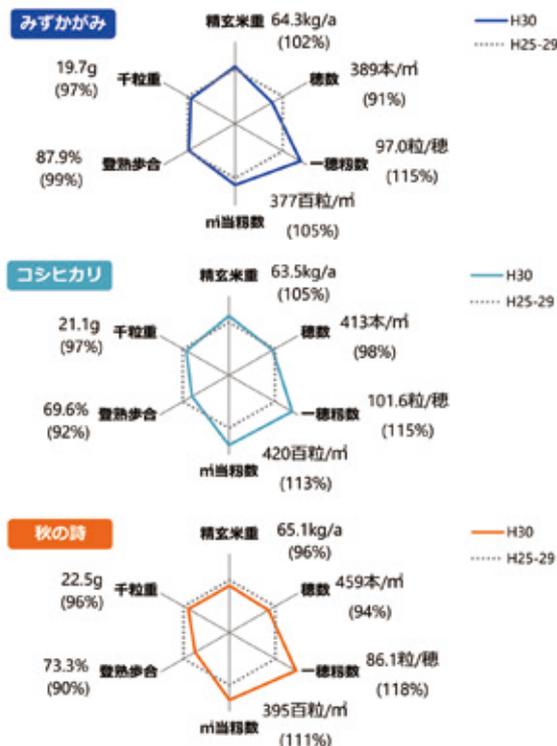


図2 水稻作況調査 収量および収量構成要素
注)精玄米重および千粒重は粒厚1.8mm以上の玄米重。

3) 県内の収量・品質の低下事例とその要因

水稻作況調査以外の品種や作期等では、以下のような収量・品質の低下事例が見られました。

■(例1) 作付の遅い早生品種や中生・晩生品種

台風による倒伏や、9月が低温多雨寡照に推移したことによる不稔籾や登熟不良、穂発芽の発生により、収量・品質ともに低下が見られました。

■(例2) 生育初期で分けつ過多になったほ場

5月中旬以降の高温により過繁茂となる傾向が見られました。そのため、有効茎歩合が低下するとともに細莖化し、夏期の異常高温に耐えきれず、籾数の減少による収量低下や白未熟粒等の増加による品質低下が見られました。

■平成30年産は複数の極端な気象条件が複雑に絡み合い、水稻に影響を及ぼしたと見られます。上記のことを参考に作柄を振り返り、平成31年産に向けた技術対策の実施に努めましょう。

平成31年産に向けた技術対策

1) 土づくり

稲の生育や籾の登熟を良好にするためには、収穫期まで活力ある根の維持が必要です。しっかりと土づくりを行いましょ。

2) 過繁茂防止と必要茎数の確保

「コシヒカリ」では、外観品質の向上のために、籾数を25,000~30,000粒/㎡にすることが大切です。適正な移植・施肥・中干しを行い、生育前半の過繁茂を防止し、健全な茎づくりに努めましょ。

一方で、「みずかがみ」は初期の茎数増加が緩慢なため、基肥は基準量の施用が重要です。また、極端な疎植は避け、茎数確保に努めましょ。

3) 茎葉の活力維持

良好な籾の登熟には、葉の光合成を活発にし、収穫直前まで籾へ炭水化物を送り続けること大切です。茎葉の活力維持のために、生育に応じた適正な穂肥を施用しましょ。

また、出穂前後は稲が最も水を必要とする時期です。出穂前後各3週間は湛水管理を励行しましょ。平成30年のように中干し後に高温で降雨が少ない場合は、特に水不足には注意が必要です。

4) 品質低下防止

登熟期の早期落水は、品質を低下させるため、収穫直前まで間断かんがいを実施しましょ。また、収穫適期を過ぎると胴割れや穂発芽などが発生し、品質が低下するため、適期収穫に努めましょ。



平成30年産 麦の品質評価結果から

滋賀県農政水産部農業経営課

○平成30年産麦の作付状況

本県の平成30年産麦の作付面積は、四麦合計で前年産と同等の7,680haとなりました。

10月下旬の降雨の影響で播種作業が遅れたことに加え、11月中旬～2月上旬の気温が平年より低い状態が続いたため、平年に比べて生育は遅れ、生育量は小さく推移しました。その後、茎数確保を図るため基準量に追加して追肥施用するよう呼びかけたことや、2月中旬以降気温が平年並～高く、日照時間が多くなったことに伴い、播種時期による差が大きいものの、全般に生育の遅れを取り戻し、生育量も平年並まで回復しました。6月は周期的に降雨がありましたが、収穫作業は順調に進み、品質は良好となりました。収量については、播種時期による差があるものの、大麦では平年並～やや多く、小麦は平年より多くなりました。

○品質評価結果

平成30年産民間流通麦(四麦合計)の品質評価結果は、Aランクが72%、一等比率が82%と良好でしたが、前年産と比べるとそれぞれ9%下がりました。

表 平成30年産民間流通麦のランク区分(品質評価)結果

麦種	品種	総量(t)	平成30年産ランク別比率(%)				1等比率(%) (9/30現在)
			A	B	C	D	
小麦	農林61号	12,853	62	25	13	0	81
	ふくさやか	3,941	100	0	0	0	95
	シロガネコムギ	815	100	0	0	0	95
	ミナミカオリ	467	99	1	0	0	0
	びわほなみ	13	100	0	0	0	87
六条大麦	ミノリムギ	307	0	0	83	17	91
	ファイバースノウ	815	63	0	37	0	77
二条大麦	サチホゴールデン	83	100	0	0	0	67
全体		19,294	72	17	12	0	82
	平成29年産	17,579	81	4	15	0	91

※総量、ランク別比率はJA全農しがのデータを一部改編。
1等比率は平成30年産麦の農産物検査結果(平成30年9月30日現在)(農林水産省)の値

小麦について、評価の判定基準となるタンパク含量、容積重をJA別に図1、2に示しました。基準値に届かなかったのは、タンパク含量が2品種の2地域、容積重が3品種の6地域でした。

実需者からは、地域・年産ごとの品質のバラツキを無くし、均質な麦を供給する事を強く求められています。品質評価の低い項目がある地域の改善はもちろ

んですが、評価が良かった地域も継続して良質麦生産ができるよう取組を進め、本県産麦全体の品質を高位平準化していく必要があります。

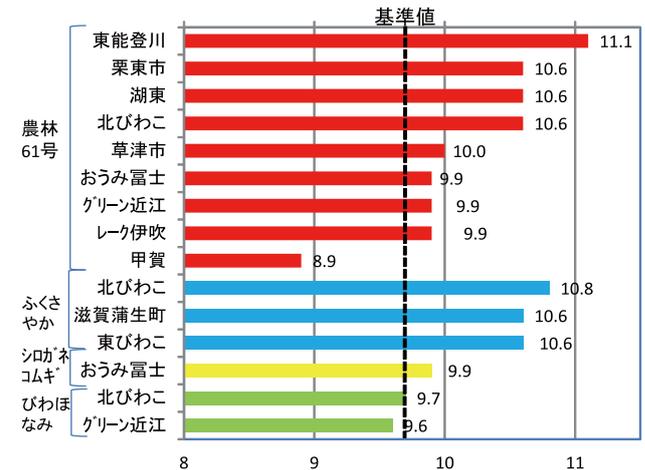


図1 H30年産 JA別タンパク質含有率 基準値9.7～11.3%

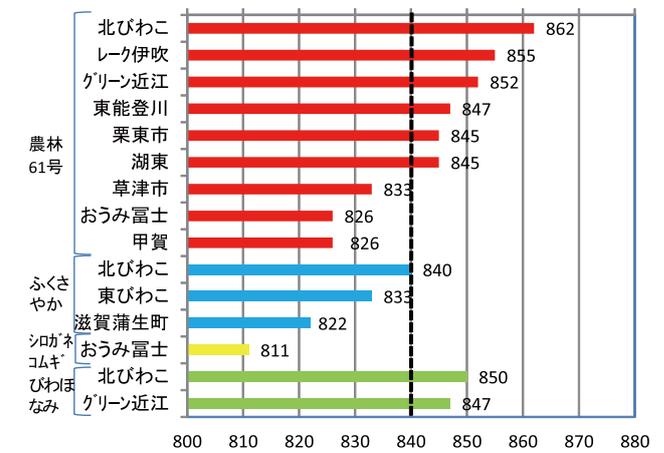


図2 H30年産 JA別容積重 基準値840g/hl以上

○麦の収量・品質向上の近道は

基本技術の徹底です!

麦作の基本は排水対策です。明渠や心土破碎等の排水対策を徹底しましょう。

米政策改革がスタートし、水田における麦作の重要性はますます高まっています。今一度、基本技術を徹底し、「転作」ではなく「本作」として意識した麦づくりを行い、実需者が求める麦を作り、農家所得向上を目指していきましょう。



第43回「ごはん・お米とわたし」 作文・図画コンクール入賞者決まる

JA滋賀中央会

JA滋賀中央会は、第43回「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールを実施し、審査結果を発表しました。今年は、最優秀賞の「特選」には「作文部門」で9人、「図画部門」で7人が選ばれました。

同コンクールは、次世代を担う県内の小・中学生に、米と農を起点に、家族などとの思い出やごはん食の良さを見直し、理解を深めてもらう運動の一環として毎年実施しているものです。今年は、小・中学校合わせて162校から「作文部門」に1,171点、「図画部門」に1,010点の応募がありました。特選のほか、作文部門には入選17人、佳作19人、図画部門では入選13人、佳作21人が選ばれました。

審査員からは、「米づくりの大変さ、尊さ、そして食に対する感謝する気持ちなど多くの学びが生き生きと描かれていた」（作文部門）、「家族で食卓を囲む場面や親子で料理をする場面を絵に表した作品がたくさんあった。農業体験を描いた作品からは、その時々作者が味わった感動が伝わってきた」（図画部門）などと評価がありました。

各部門の入賞者（特選・入選）は次の通りです。

作文部門

● 特選 ●

高畑心美（志賀小1）、守 來実（守山小2）、野々口瞬（長等小3）、藤塚 柚（旭森小4）、岩見玲音（三上小5）、七里 悠（朝日小6）、上田堯大（滋賀大学教育学部附属中1）、澤田 遼太（彦根市立南中2）、山本一太（多賀中3）

● 入選 ●

倉田寧乃（金城小1）、元部紗和（湖東第二小1）、大田峻伍（真野小2）、吉田永愛（河南小2）、河合陽菜（綾野小3）、膽吹春太（伊吹小3）、佐々木心那（平野小4）、大橋未空（坂田小4）、北居和紗（坂田小5）、今中咲希（春照小6）、竹内柁樹（真野小6）、蓑輪 大（草津中1）、北野優翔（仰木中1）、満田明里（滋賀大学教育学部附属中2）、脇 優太（五個荘中2）、宮崎康生（仰木中3）、土川翔真（双葉中3）

図画部門

● 特選 ●

川端結慈（金田小1）、鳥居勇斗（金田小2）、村木日和（志津南小3）、佐々木ゆり（木戸小4）、名倉明輝（志津南小5）、池本未来（瀬田北小6）、堂山高雅（鳥居本中2）

● 入選 ●

今吉花恋（湖東第三小1）、川上蓮斗（玉津小1）、沖田璃奈（唐崎小2）、武市珠來（守山小2）、八田優紀奈（高島小3）、大塚杏奈（真野北小3）、野々口雄飛（笠縫東小4）、佐保 葉奈（大宝小4）、野坂みのり（塩津小5）、吉岡巧翔（坂田小5）、松島正周（城北小6）、川瀬菜々子（金田小6）、中尾直太郎（滋賀大学教育学部附属中1）

作文部門(特選)

おにぎりおねえちゃん

守山市守山小学校 2年生 守 來実

わたしには、5さいのいもうとと3さいのおとうとがいます。いもうととおとうとは、にがてなたべものがたくさんあります。きれいなおかずがでた日、いもうとは

「キレイやからいらない。」

といいます。おとうとは

「もういらんわ、ごちそうさま。」

といいます。二人ともなんにもごはんをたべようとしません。わたしは、二人がごはんをたべないとおなかがすくし、大きくなれないと思うのです。おかあさんもこまってしまう。

そんなとき、わたしはいいことを思いつきました。二人ともごはんはだいすきなのでおにぎりをつくってあげることにしました。いもうとは、しゃげがすきなのでしゃげおにぎりをつくってあげました。やさいをぜんぜんたべないおとうとには、やさいふりかけのおにぎりをつくってあげました。ごはんをいらないといっていた二人だけど、わたしがつくったおにぎりはパクパクたべておかわりもしてくれました。それをみてわたしは、さくせんたいせいこうと思ってとてもうれしかったです。

それから二人がごはんをいらないといったときは、わたしがしゃもじとラップをもってきて、おにぎりおねえちゃんになります。あつあつごはんでおにぎりをつくってあげると二人ともよろこんでごはんをたべてくれます。本とうはすききれいをしないでおかずもたべてほしいけど、これからもむりなときはわたしがおいしいおにぎりをつくってあげようと思います。

図画部門(特選)



「ちらしずし だいすき!」

近江八幡市立金田小学校 1年

川端 結慈



「キャンプでカレーを作ったよ!!」

草津市立志津南小学校 5年

名倉 明輝



もっと食べよう「近江米」! 県民運動拡大中!!

滋賀県米消費拡大推進連絡協議会

1) 近江米を応援するファン36,000人を突破!

平成27年にスタートしました近江米の消費拡大を進める《もっと食べよう「近江米」!県民運動》。この県民運動では、近江米を応援いただく根強いファンを確保するため、『「近江米」もっと食べます宣言』を集めています。これまでの3年半で多くの方々から宣言をいただき、取組人数は36,940名にまで広がっています。(平成30年11月20日現在)



もっと食べよう「近江米」!
県民運動PRポスター

2) 関係団体と連携して、さまざまなイベントで県民運動をPR!

《もっと食べよう「近江米」!県民運動》を広く発信し、近江米の消費拡大を推進するため、県内のさまざまなイベントで県民運動をPRしてきましたのでそのひとつをご紹介します。

○もっと食べよう「近江米」!うまーい!新米祭り!♪みんなで歌おう近江米ソング発表会♪

平成30年10月28日(日)にアル・プラザ堅田店にて、新米イベントを開催しました。宮川大輔近江米PR隊長が登場し、三日月大造滋賀県知事とともに、新米「みずかがみ」や健康をテーマにした県産野菜をたくさん食べて頂けるメニュー「滋賀めし」の登場に思わず宮川隊長は『うまい!うまーい!!』と大きな声で絶賛。さらに、今回初披露となる近江米ソング「おいしが うれしが近江米」を堅田保育園の園児のみんなと一緒に大合唱。一生懸命歌う園児たちと600名を超える会場のお客さんの手拍子で会場は一体感に包まれました。



また、皆様からの強い要望にお答えし、このたび無料ダウンロードを開始いたしました。

近江米公式ソング「おいしが うれしが 近江米」<https://shigaquo.jp/campaign/omimaisong.html>

3) 私の“近江米エピソード”募集中!

さらなる消費拡大を図るため、熱心な近江米のファンの確保に向けて、私の“近江米エピソード”を募集しています。これまでに1,270名のエピソードが集まっており、ラジオなどで紹介しています。今後、量販店の米売場や教育現場での活用を促進していく予定です。

4) さらなる近江米の消費拡大に向けて

当協議会では、近江米の消費拡大に向けて、県内外問わず多くの方々に近江米の魅力を知っていただくために《もっと食べよう「近江米」!県民運動》を盛り上げていきます。応援よろしくお願ひします。



「日本一! 環境こだわり米」キャンペーンによる 環境こだわり農業の発信について

滋賀県農政水産部食のブランド推進課



平成30年度キャンペーンシール

滋賀県では、環境こだわり農業の認知度向上および消費拡大を目的に、「日本一!環境こだわり米」新米キャンペーンを実施しました。米袋に貼付しているシールをハガキに貼付し、クイズに回答いただいた方から抽選で滋賀県の産品が当たるといった内容になっています。キャンペーン自体は新米シーズンの8月下旬から12月末まで実施し、応募期間は平成31年1月31日までとされていますが、既にたくさんのご応募をいただいているところです。

このキャンペーンは今年度で6回目となりますが、毎年県内外から大きな反響があり、県外での認知度向上および消費拡大に繋がっていると

考えられます。昨年度からは名古屋等の東海方面、首都圏方面の卸売事業者にも当キャンペーンに御協力いただいています。

毎年10,000通を超える応募があり、平成30年度も12月時点で既に約10,000通の応募がきています。その中で、以下のような応援のコメントを多数いただいています。

今後も「環境こだわり米」が県内外の消費者に選ばれるよう、関係者一体となってPRを実施していきます。



店頭販売



キャンペーンコメント(抜粋)

- 私の住んでいるおとなりの県で農薬・化学肥料半分以下という安心安全なお米!とてもおいしいお米でした。これからも食べて応援します。(京都府)
- 低農薬低化学肥料で私たちの生活に欠かせない水源の『琵琶湖』を守ってくださってありがとうございます。(大阪府)
- びわ湖にもやさしい取組に大変ありがたく思っています。これからは「かんきょうこだわり米」を目印に購入したいです。(大阪府)
- ご飯大好き! 農薬も化学肥料も通常の半分以下だなんて手間がかかっているんでしょうね。おいしく頂きました。(兵庫県)



オーガニック農業の推進に向けて (栽培技術の確立と販路開拓)

滋賀県食のブランド推進課・農業技術振興センター・近江米振興協会

1. 水稲オーガニック栽培技術の確立

農薬を使用しない水稲オーガニック栽培では、雑草対策が最大の課題になっています。

そこで、昨年に引き続き、オーガニック栽培での抑草技術の確立を目指し、水田用除草機(8条)と複数の技術(複数回代かき、米ぬか散布、深水管理)を組み合わせた体系の検証に県内3か所で取り組みました。

表 実証ほの作業体系

	代かき	移植日	機械除草	
	回数(実施日)		1回目	2回目
甲賀市	2回(4/21、5/23)	5/26	6/3	6/10
東近江市	4回(4/29、5/11,20,26)	5/28	6/8	6/18
長浜市	3回(4/13、5/23,28)	5/28	6/5	6/15

(注)除草効果を上げるため、機械除草を代かき後10日程度とした

除草効果が最大限に発揮されると10aあたり7俵の収量が見込めるものの、そのためには以下の点に注意が必要ながことが明らかとなりました。①1回目の機械除草時までに苗の活着を十分にするため、中苗以上の健苗を移植し、株間揺動ツースの設定を高速モードにすることで株間除草の効果が上がる。②植代から機械除草までの期間が短いと除草効果は向上するものの、欠株率が高まる。③機械除草時に水深が深いと、水流の影響で土や藻類が稲に覆い被さり生育が抑制される。



写真1 実証ほ現地検討会

2. オーガニック米の新規販路開拓

新たな販路を開拓するため、近江米振興協会では関係団体と連携しながら、横浜で開催された「国際オーガニックEXPO」を皮切りにこれまで3か所の展示会に出展し、滋賀県の取組を国内外にPRしました。



写真2 EXPOでのPR風景

会場の消費者にオーガニック農産物の消費頻度を訪ねると「ほぼ毎日食べる」方が約3割、「週に何回か食べる」方も含めると6割を超え、また、今後の購入希望については米を求める回答が最も多くなりました(図1)。

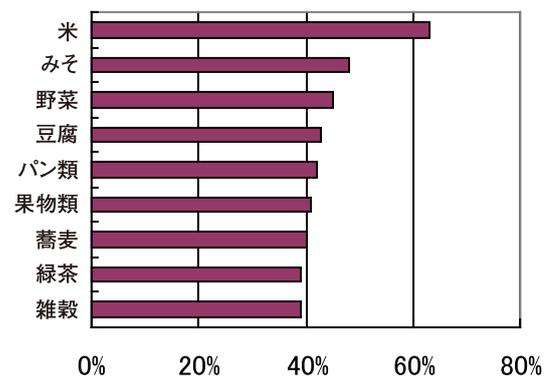


図1 オーガニック農産物の購入希望 (N=120)

また、オーガニック農産物に関心のある事業者として、今後の市場拡大を見据え新たに取扱を検討する流通関係者や他との差別化を図ろうとする企業や病院等の食堂や飲食店経営者等が来場されており、本県のオーガニック米の生産拡大に向けた取組にも関心を示されました。

3. さいごに

今後、2年間の実証結果を基に、水稲オーガニック栽培の安定生産を実現できるよう、技術マニュアルを作成するとともに、引き続き販路開拓を進めながら、水稲オーガニック栽培が環境こだわり農業の象徴となるよう普及拡大を目指していきます。

大規模乾燥調製貯蔵施設の課題と対策

大規模乾燥調製貯蔵施設での課題は、施設の老朽化・利用率の低下・担当職員の減少等があり、オペレーター等現場担当者の皆さん方は、品質事故等の防止のみならず、安全・安心・良品質米麦を出荷するために万全な体制で取り組んで頂いております。施設運営については多くの課題が山積しており、以下、気のついた点を記述します。

I 良品質米麦づくりについて

1. 計画的な荷受けについて

(1) 米について

本年産米の集荷は、台風被害の影響及び施設の老朽化等で施設利用ができない施設もあり、収穫最盛期には早生3品種の同時荷受のピークがありましたが、利用率低下及び収穫量減少等の影響も含めて、施設の乾燥処理能力を超えた施設はありませんでした。

「みずかがみ」の30年産米の荷受施設は1施設増えて、県内19施設で対応されましたが、「みずかがみ」の作付けを推進していることから今後さらに荷受施設が増加する事も鑑み、乾燥処理能力、サイロ及び一時貯留ビン数を総合勘案した荷受計画を各JA施設運営委員会で十分検討を行い計画することが重要です。

(2) 麦について

平成30年産以降も主食用米の生産調整が必要であり、今後も麦の作付けは重要な位置づけとなることから、施設での対応は必要不可欠です。

麦は成熟期が短期間のために荷受けが集中する上に、「梅雨の晴れ間」に刈取りが集中して過剰荷受けとなることがあります。そのような場合は緊急に荷受け制限・休止ができる体制を作っておく必要があります。今年度品質事故がなかったからといって安心は禁物です。

(3) 乾燥処理能力について

聞き取り調査時において、老朽化施設では設計された乾燥能力よりかなり低下している施設があり、「施設を実際に稼働した場合の乾燥処理能力」を勘案した荷受計画が必要です。

2. 荷受から乾燥調製について

(1) 実需者の要望に応えるには、整粒歩合の高い米麦を出荷する事が重要です。

荷受け米麦の品質仕分けと区分管理の徹底により「良いもの」と「悪いもの」を混合しないようにすることや、丁寧な調製・精選により品質を高める事が重要です。

県内各施設で色彩選別機等の導入は年々多くなっており、本年巡回時調査では20施設で導入されています。今後、品質向上を図るためにも必要な機器です。

(2) 乾燥作業で(熱風乾燥方式)穀温測定ができていない施設があります。サンプルを抽出しにくい施設もありますが、可能な限り穀温測定(魔法瓶等の活用)を実施する必要があります。

3. 保管管理について

(1) 貯蔵・保管中の穀温管理について、穀温測定とその記録が自動的に行われる施設では機器任せで、パソコンでの記録簿作成の傾向があります。

日々穀温の状況を把握するには、オペレーターが自ら穀温の動きを「観る」「グラフ化」する事により、少しの穀温の動きも見逃さないこと。日々の上級責任者による確認も重要です。

貯蔵・保管開始後、外気温が低下しているにもかかわらず、サイロ内の穀温が高い施設があります。穀温が高いと、粉の消耗・劣化がしやすくなるので、外気温が低い日に時間帯を定めて、出来るだけ早く穀温を20℃以下にする必要があります。

(2) 結露は、過剰荷受けとともに品質事故の大きな要因となっていますが、上部空間の多いサイロは特に注意して粉状態の異常の有無を適宜確認して下さい。

協会だより

Ⅱ 環境美化に対する取り組みについて

施設は食品工場です。環境美化を徹底する事によって、美観だけでなく、害虫の発生防止対策にもなります。環境美化の一層の取り組みをお願いします。

Ⅲ 施設の計画的整備について

多くの施設が老朽化しており、整備が必要な箇所でも予算の関係上整備ができない箇所があります。稼働時の修繕は処理能力に影響を与え、「品質事故」の発生要因となりかねません。

メーカーの部品生産供給の内容が変わり、古い機器類は、注文しても交換が難しい場合がありますので、計画的整備が必要です。

Ⅳ 労働安全について

(1) 共同乾燥施設は、労働安全衛生法の①乾燥設備作業主任者②酸素欠乏危険作業主任者③はい作業主任者④フォークリフト運転技能資格者⑤玉掛技能資格者等の職員配置が必要です。

無資格運転は「法律違反」になり、労働災害(人身事故)を起こす危険も高くなります。

(2) 荷受けがフレコンの場合、荷受けホッパー口で紐を解く場合にロープ切れによる落下事故が発生し、「荷受け台」の活用が事故防止には必須です。生産者にもロープ切れの恐れがあるフレコンの使用をしないよう、収穫前から啓蒙・指導していく必要があります。

※まとめ

近年、米の消費動向の変化により、近江米の生産・流通・販売を取り巻く状況は厳しさを増しております。各施設の担当オペレーターの皆さん方には大変ご苦勞を頂いていることと思いますが、施設稼働で「慣れ」は大変危険ですので、各種諸帳簿の記入を正確に行い、**上級責任者の確認**を受けて頂くことが大切な事だと考えます。特に、保管管理での穀温測定には細心の注意を払って頂き、共乾施設の運営管理及び環境美化に万全を期して頂くようお願いします。

共同乾燥施設の事故防止の対応として、31年2月に計画しております**施設管理者等を対象とした研修会**で、「施設管理者の役割及び事故防止」関係等についての内容を企画しておりますので、是非ご参加をお願いします。

平成30年度「みずかがみ」食味コンクールの結果について

今年度実施しました食味コンクールへの応募総数は266点で、下記の10名の方々が入賞され、来る1月27日に甲賀市において開催予定の「近江米振興フォーラム」で表彰されることになっています。

平成30年度「みずかがみ」食味コンクール 入賞者一覧

表彰区分		入賞者	
		市町	氏名
最優秀賞	知事賞	甲賀市	藤井 建幸
優秀賞	JA滋賀中央会賞	東近江市	桂田 武司
	全農滋賀県本部長賞	東近江市	池田 佳一郎
	滋賀県主食集荷商業協同組合理事長賞	長浜市	間所 秀夫
優良賞	近江米振興協会会長賞	草津市	山元 新司
		甲賀市	山本 俊雄
		東近江市	谷田 久治郎
		豊郷町	農事組合法人 あめふりのファーム
		米原市	小川 武彦
		高島市	中田 多市